

# メールマガジン「ガゼッタ」まとめ(16)

第 76 号～第 80 号 (2014 年 9 月 25 日～11 月 5 日配信)

配信した「ガゼッタ」No.76-80 のまとめです。書式と一部表記を変更して図版を取り込み、pdf にしました。



## ◆ガゼッタ第 76 号◆

ガゼッタ第 76 号をお届けします。

本号は、「日本ロッシェニ協会の定期演奏会について」、「新譜 DVD : 《アルジェのイタリア女》」、「ロッシェニ財団の新刊文献 2 点」、「外国語と外国人名のカタカナ表記の話 (4)」をお届けします。

なお、8～9 月の協会ホームページ更新は次のとおりです。

- ・「その他の論考」に「日本におけるロッシェニ受容の歴史——明治元年から昭和 43 年まで (1868～1968 年)」、同じページの「初版・初期楽譜 (ロッシェニ以外の作品)」に「マスネ《マギ》初版楽譜」を掲載し、併せて掲載済みの「ロッシェニのピアノ曲 (2) 作品目録とディスコグラフィ」を増補版と差し換えました (8 月 8 日アップ)。
- ・メルマガ「ガゼッタ」第 66 号から第 70 号までのまとめを掲載し、「その他の論考」のロッシェニ図像学の項目に「44 歳のロッシェニの肖像 (パリ、1836 年)」と「47 歳頃のロッシェニの肖像」、同じページの「初版・初期楽譜 (ロッシェニ以外の作品)」に「マスネ《グリゼリディス》初版・初期楽譜 (マスネ自筆献辞付き)」を掲載しました (9 月 1 日アップ)。
- ・「ロッシェニ作品解説」に掲載済みの《パルミラのアウレリアーノ》作品解説、《アルミーダ》作品解説、《結婚手形》作品解説を、それぞれ最新情報を加えた増補改訂版と差し換えました (9 月 3 日アップ)。

日本ロッシェニ協会ホームページはこちら→ <http://societarossiniana.jp/>

## ▼日本ロッシェニ協会の定期演奏会について▼

報告が遅れましたが、日本ロッシェニ協会の定期演奏会を来年 3 月 29 日 (日)、虎ノ門の J T ホール (JT アートホールアフィニス) にて開催します。

◎日本ロッシェニ協会定期演奏会「ロッシェニ——パリの煌めきとエスプリ」(仮題)

期日：2015 年 3 月 29 日 (日) 14 時開演

会場：JT ホール (JT アートホールアフィニス。東京メトロ銀座線、虎ノ門駅 3 番出口より徒歩 4 分)

出演：山口佳子 (ソプラノ)、富岡明子 (メゾソプラノ)、中井亮一 (テノール)、金井紀子 (ピアノ)、水谷彰良 (解説)

パリのロッシェニにテーマを絞り、《ランスへの旅》よりフォルヴィル夫人のアリア、二つの二重唱、《オーリー伯爵》より三重唱、カンタータ《ジョヴァンナ・ダルコ》ほかを解説付きで演奏します。

チケットの発売日と価格は未定。10 月中にチラシを作成して正式発表させていただきます。

## ▼新譜 DVD : 《アルジェのイタリア女》▼

◎Rossini: L'italiana in Algeri

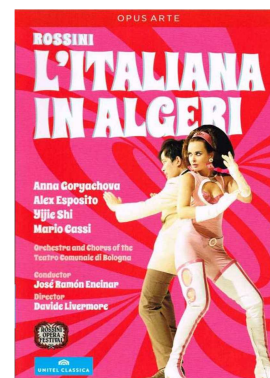
ロッシェニ：歌劇《アルジェのイタリア女》

ダヴィデ・リヴェルモーレ (演出) ホセ・ラモン・エンシナル指揮ボローニャ市立劇場管弦楽団 & 合唱団 アンナ・ゴリャチョーヴァ (Ms) シー・イージェ (T) アレックス・エスポージト (B-Br) マーリオ・カッシ (Br) ほか

収録：2013 年 8 月ペーザロ Opus Arte OA1141D (DVD) 及び OABD7148D (BD)

昨年 8 月 ROF 上演映像で、先月発売されました。序曲の間にアニメーションを用い、石油採掘で潤うアルジェでリンドーロが逮捕され、SOS を受けたイザベッラがローマ空港から救出に向かう設定です。リンドーロを 007 のジェイムズ・ボンド、イザベッラをピンクパンサーに見立て、男声合唱がプレスリーの髪型で登場します。カンフー・アクションを交え、ゴーゴー・ダンスで 60 年代風俗を表すかと思えば、アリアを歌いながらムスタファがパイアグラを呑むなど、ハチャメチャなリヴェルモーレ演出が笑えます。

筆者は現地で 3 回観劇し、ゴリャチョーヴァの音量不足に不満をおぼえましたが収録ではその点の問題は無く、リンドーロのイージェも若々しい歌声と演技で大健闘、ムスタファ役のエスポージトも絶品です。旅客機の残骸



が予定通りの落ち方をせず、ムスタファの股間から出るはずの煙が出ないなど収録日の失敗はそのままですが、映像ではアニメと舞台上の出来事が違和感なく繋がり、実際の舞台以上に楽しめます。

## ▼ロッシェニ財団の新刊文献2点▼

ロッシェニ財団の文献は、例年どおり研究紀要とリブレット集成の新刊が出版されています。いずれもクレジットに「2013年12月」とありますが、実際の発行は2014年です。

### ◎Bollettino del centro rossiniano di studi., Anno LIII 2013., Fondazione Rossini, Pesaro, 2013.

ロッシェニ研究所紀要 2013 年度版。ペーザロ、ロッシェニ財団、2013 年。214 頁、価格 25 ユーロ。次の五つが掲載されています。

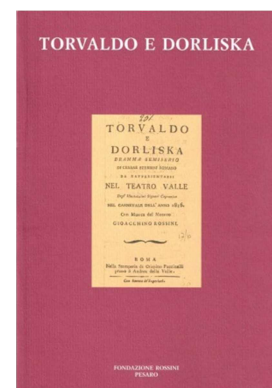
- In ricordo di Giorgio De Sabbata (pp.5-7.)  
かつてペーザロ市長を務め、全集版や ROF の立ち上げにも尽力した政治家ジョルジョ・デ・サッパターへのロッシェニ財団による追悼文です(昨年7月27日没)。
- Will Crutchfield., G. B. Velluti e lo sviluppo della melodia romantica (pp.9-83.)  
《パルミラのアウレリアーノ》アルサーチェの初演歌手でもあるカストラート、ジョヴァンニ・バッティスタ・ヴェッセルレーティの装飾法に関する論文。その装飾法が初期ロマン派の旋律に与えた影響を、さまざまな譜例を通して実証しています。
- Alice Tavilla., 《Trovare nuove forme》 al tempo di Rossini. Per un'analisi della prima produzione di Giovanni Pacini (pp.85-108.)  
ロッシェニが定型化した複数のテンポによる楽曲構造を、初期のジョヴァンニ・パチーニが拡大したことを台本と楽譜から立証する論文。パチーニが1819年頃にそうした試みをしていたことが判ります。
- Reto Müller., Bibliografia rossiniana 1991-1995. (pp.109-179.)  
1991~1995年に世界で出版されたロッシェニ関係文献と論文の目録で、5年間のそれが545点リストアップされています。日本語文献はスタンダード『ロッシェニ伝』(山辺雅彦訳、みすず書房)、マリオ・ニコラーオ『ロッシェニ仮面の男』(小畑恒夫訳、音楽之友社)、水谷彰良『ロッシェニと料理』(透土社)が採用されています。
- Maurizio Modugno., Discografia rossiniana., Parte seconda. Le opere da Tancredi a Elisabetta, regina d'Inghilterra. (pp.181-214.)  
ロッシェニのディスコグラフィ第2部。《タンクレーディ》から《イングランド女王エリザベッタ》まで6作のディスク・データと编者によるコメントを掲載。



### ◎Torvaldo e Dorliska (I Libretti di Rossini 19., a cura di Francesco Paolo Russo), Fondazione Rossini, Pesaro, 2013.

『トルヴァルドとドルリスカ』(「ロッシェニのリブレット」第19巻、フランチェスコ・パオロ・ルツ編) ペーザロ、ロッシェニ財団、2012年。CL+562頁、価格50ユーロ。

シリーズ「ロッシェニのリブレット」の第19巻《トルヴァルドとドルリスカ》です。フランチェスコ・パオロ・ルツによる浩瀚な序文に続いて、ロッシェニ《トルヴァルドとドルリスカ》の原点に位置するクーヴレの小説、これを題材にした《ロドイスカ》の題名を持つ劇とオペラ台本、チェーザレ・ステルビーニによる3種の台本が複製され、この作品の台本研究に不可欠の文献となっています。



## ▼外国語と外国人名のカタカナ表記の話 (4) ▼

(4) 対応がまちまちなVとWのカタカナへの置き換え

今に始まったことではなく、昔から混乱をきたしているのが、VとWのカタカナへの置き換えです。V+母音を「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」に置き換えると「バイオリン」「ビバルディ」「ベルディ」になり、「ヴァ、ヴィ、ヴェ、ヴェ、ヴォ」に置き換えると「ヴァイオリン」「ヴィヴァルディ」「ヴェルディ」になるという問題で、筆者が子供のころは「バイオリン」「ビバルディ」「ベルディ」が主流でした。

現在はサッカーの「ヴェルディ川崎」(旧・読売ヴェルディ、現・東京ヴェルディ)や2001年設立「日本ヴェルディ協会」など、「ヴェルディ」の使用が当たり前になりましたので「ベルディ」と書く人はいないと思いきや、新聞やTVではなお現役です。ひと昔前と違うのは、「ベルディ」よりも「ヴェルディ」が増えたこと。試みに無料で見られる朝日新聞デジタルで「ベルディ オペラ」「ヴェルディ オペラ」をサイト内検索すると、前者が31件、後者が86件で、約7割が「ヴェルディ」でした。でも、最近の記事を読んでもどんな基準で「ヴェルディ」と「ベルディ」の違いが生じるのか、いま一つ判りません。

NHKはある時点から「ヴェルディ」に変わりましたが、Giuseppe Verdi のみの特例らしく、Monteverdi は「モ







初版楽譜、ヴォルフ=フェッラーリ《四人の頑固者》初版楽譜、ヴォルフ=フェッラーリ《結婚している恋人たち》初版楽譜を掲載しました（10月10日アップ）。

日本ロッシェニ協会ホームページの「その他の論考」はこちら→ <http://societarossiniana.jp/others.html>

## ▼11月の国内のロッシェニ上演と演奏会▼

国内のロッシェニ作品の上演や演奏会は多くありませんが、11月19日（水）に大田区民プラザ小ホールでピアノ伴奏による《セビリアの理髪師》、11月23日（日）に昭和音楽大学アートマネジメントコース企画の演奏会「食通音楽家！！ロッシェニの晩餐会～音楽と料理の関係～」が昭和音楽大学南校舎 5F ユリホールで行われます。

### ◎歌劇「セビリアの理髪師」公演 11月19日（水）18:30 開演、大田区民プラザ小ホール

以下、主催のシュトラウス企画ホームページ（下記）から基本情報を転載します。ピアノ伴奏の全幕上演で、指揮の河合良一さんがチェンバロでレチタティーヴォ・セッコを伴奏するようです。

歌劇「セビリアの理髪師」公演

日時：11月19日（水） 18:30 開演

場所：大田区民プラザ小ホール

指揮：河合良一

演出：桜田ゆみ

出演：李昇哲（フィガロ）、中川裕子（ロジーナ）、佐々木洋平（伯爵）、中川郁太郎（ドン・バルトロ）、小田桐貴樹（ドン・バジリオ）、吉山博子（ベルタ）、本山天音（フィオレッコ、隊長）、ピアノ：船橋登美子

チラシと詳細は、主催：シュトラウス企画のホームページをご覧ください→ <http://strausskikaku.blog.fc2.com/>

### ◎「食通音楽家！！ロッシェニの晩餐会～音楽と料理の関係～」

昭和音楽大学アートマネジメントコースの企画による演奏会で、歌手2人（三浦克次、吉田郁恵）、ピアニスト2人（浅野菜生子、加戸あさ子）が出演し、小畑恒夫さんが解説を務め、食通にちなんでロッシェニのピアノ曲も演奏されます。以下、昭和音楽大学のホームページ（下記）から基本情報を転載します。

「食通音楽家！！ ロッシェニの晩餐会 ～音楽と料理の関係～」

昭和音楽大学音楽芸術運営学科アートマネジメントコース企画制作演習企画公演 Vol.2

日時：2014年11月23日（日・祝） 開演 15:00 開場 14:30

会場：昭和音楽大学南校舎 5F ユリホール

（小田急〔小田原線・江ノ島線・多摩線〕新百合ヶ丘駅南口より徒歩4分）

出演：三浦克次（バス・バリトン）、吉田郁恵（メゾ・ソプラノ）、浅野菜生子（ピアノ）、加戸あさ子（ピアノ）、小畑恒夫（解説）

曲目：《タンクレーディ》より「この胸の高鳴りに（リゾットのアリア）」、《老いの過ち》第5巻 幼い子供たちの為のアルバムより「ロマンティックな挽肉」、《セビリアの理髪師》より「今の歌声は」、《ウィリアム・テル》より「動いてはいけない」、《老いの過ち》第4巻 4つのデザートより「干し無花果」、《アルジェのイタリア女》より「おお！あの顔 あの姿！」ほか

チラシと詳細は、昭和音楽大学のホームページをご覧ください →

<http://www.tosei-showa-music.ac.jp/tagblocks/concertnews/news/concert/0000001237.html>

## ▼外国語と外国人名のカタカナ表記の話（6）▼

（6）人名を国籍や言語に即した発音で表記するのが正しいのか？

私は前回の末尾に、「人名は発音どおりに、その人物の国籍や言語に即して転記する必要があるのだろうか？」と疑問を呈しました。なぜなら一般の常識に反して、私は必ずしも外国人名をその人物の国籍や言語に即して仮名書きする必要はない、と考えているからです。ここではロッシェニの妻となる大プリマ・ドンナ、イザベッラ・コルブラン（Isabella Colbran, 1784-1845）から話を始めましょう。

ロッシェニの人生と深い結びつきをもつ歌手コルブランについて書く際に、私は一貫して前記のように「イザベッラ・コルブラン」と表記します。でも同業者の中には、コルブランはスペイン人で本名は Isabel（イサベル）だから、との理由で常に「イサベル・コルブラン」と書く人がいます。では、そんなことを百も承知の私がなぜ、「イザベッラ（Isabella）」と書くのでしょうか……答えは簡単です。彼女はオペラ歌手としての活動をイタリアで「Isabella Colbran」として行い、イタリア以外の国々でもその名前で出演しているからです。それゆえロッシェニのデズデーモナやエルミオーネの初演歌手をイザベッラ・コルブランと表記し、伝記的記述で必要と判断すれば、彼女がスペイン生まれの歌手で生名がイサベルであると付記するわけです。別な言い方をすれば、オペラ歌手としての芸名がイザベッラ・コルブランならそう書くべきで、そこに本名を用いると結果的に誤った情報を発信することになるわけです。



題目：クラウディオ・アッパード追悼&復活蘇演 30周年記念、1984年 ROF 《ランスへの旅》鑑賞会  
日時：2014年12月23日（火・祝）午後1時30分開演～午後5時終了予定  
会場：北沢タウンホール 3F ミーティングルーム（下北沢駅より徒歩4分）  
地図：<http://kitazawatownhall.jp/map.html> 会員ならびにそのお連れの方は無料。その他の方は当日1,000円を頂戴します。

#### ▼〈魅惑のパガニーニ〉～パガニーニ愛用の名器レプリカによる演奏会（11月2日）▼

日本在住の弦楽器製作者アンドレアス・プロイスさんは、会員の加藤ご夫妻の娘婿さんに当たります。このたびプロイスさんが製作したパガニーニ愛用の名器レプリカを用いてパガニーニ作品を演奏する演奏会が、11月2日、虎ノ門のJTホールで行われますのでご案内します。ロッシェニの親友パガニーニの作品を、パガニーニの名器レプリカで聴くまたとない機会です！

##### ◎魅惑のパガニーニ

期日：2014年11月2日（日）13時半開演

会場：虎ノ門JTアートホールアフィニス

出演：ヴァイオリン：レイ・イワズミ、ギター：鈴木大介

曲目：パガニーニ《ヴァイオリンとギターのための華麗なる変奏曲（カプリス24番）》《ソナタ 作品2-4、3-6》ほか。

コンサート情報はこちら→

<http://sort.eplus.jp/sys/T1U14P0010163P0108P002133995P0050001P006001P0030001>

Youtubeのコンサート情報と演奏のビデオはこちら→ <https://www.youtube.com/watch?v=ZzIaHsDXmCk>

#### ▼11月にクラシカ・ジャパンで2013年ROF《ギョーム・テル》初放送！▼

これまでCS等のロッシェニ放送の情報を書きませんでした。今号から毎月25日配信のメルマガに、翌月のクラシカ・ジャパンやWOWOWその他の放送予定を掲載することにしました。

11月にはクラシカ・ジャパンで、なんと昨年ROFの《ギョーム・テル》が日本語字幕付きで初放送されます。併せてROF《オーリー伯爵》《マティルデ・ディ・シャブラン》《絹のはしご》も再放送されますから、ロッシェニ月間みたいですね。

◎《ギョーム・テル》2013年ROF（11月8、10～16、23日放送）

◎《オーリー伯爵》2008年ROF（11月4～8、10日放送）

◎《マティルデ・ディ・シャブラン》2012年ROF（11月15、17～22、30日放送）

◎《絹のはしご》2009年ROF（11月25～29日放送）

クラシカ・ジャパンの放送詳細はこちら→

[http://www.classica-jp.com/program/genre.php?list\\_year\\_month=201411&genre\\_id=2](http://www.classica-jp.com/program/genre.php?list_year_month=201411&genre_id=2)

なお、WOWOWでは11月11日に2010年メトロポリタン歌劇場《アルミーダ》が再放送されます。

WOWOWの放送詳細はこちら→

[http://www.wowow.co.jp/pg\\_info/detail/101564/index.php#content?target=scene020&m=01](http://www.wowow.co.jp/pg_info/detail/101564/index.php#content?target=scene020&m=01)

#### ▼ロッシェニ文献の新刊：F.ベニシュ『装飾、及びロッシェニのイタリア・オペラにおける変奏実践』▼

◎Francis Benichou: Verzierungs- und Variationspraxis in den italienischen Opern Rossinis., Leipzig, Leipziger Universitätsverlag, 2014. (382頁。価格：25-ロ)  
フランシス・ベニシュ『装飾、及びロッシェニのイタリア・オペラにおける変奏実践』ライプツィヒ大学出版局、2014年

ドイツ・ロッシェニ協会によるロッシェニ文献出版の第9弾として、ロッシェニ作品におけるヴァリアツィオーネ（装飾的変奏）に関する研究書が出版されました。このテーマに関する貴重な文献といえますが、ドイツ語とあつて日本の読者は限られるでしょう。著者フランシス・ベニシュはトリエステのタルティーニ音楽院のオーケストラと、「ヴィルトバートのロッシェニ」音楽祭のアンサンブル、ヴィルトゥオーゾ・ロッシニアーニの指揮者を務めています。

ドイツ・ロッシェニ協会による紹介はこちら→

<http://www.rossinigesellschaft.de/soc/publ/schriften.html#band9>



#### ▼外国語と外国人名のカタカナ表記の話（7）▼





褒めをいただくリニューアル HP が 2012 年 9 月に誕生しましたが、ある日突然完成品ができるはずもなく、筆者は最初の 2 年を試行期間と考えていました。そして今回新たに HP の配置や構成の一新を、お願いしたわけです。

これは事実上の作り直しですから、管理人さんに大変な苦勞をおかけしましたが、その甲斐あって内容目次を一目で見渡せ、各コンテンツへのアクセスが容易になった新 HP が出来上がりました。この新 HP は現在のそれと差し換える形で 11 月 7 日から始動しますので、感想やご意見をいただければ幸いです。工事中も含め、コンテンツは筆者がエンドレスで提供していきますので、協会ともどもご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

### ▼マリア・カラスの《イタリアのトルコ人》と《セビーリャの理髪師》リマスター盤発売！▼

先月、マリア・カラスのスタジオ録音のマスターテープにリマスターを施したディスクが系統的に発売されました。ロッシーニのオペラは《イタリアのトルコ人》と《セビーリャの理髪師》で、これがカラスの録音したロッシーニ作品唯一の全曲盤となります。この 2 点については現在発売中の『モーストリー・クラシック vol.211』（2014 年 12 月号）26-27 頁に紹介しましたので、ここでは簡単にふれるにとどめます。

- ◎《セビーリャの理髪師》1957 年 2 月録音（ステレオ）、2014 年リマスター  
アルチェーオ・ガッリエラ指揮フィルハーモニア管弦楽団&合唱団 ロジーナ：  
マリア・カラス、フィガロ：ティート・ゴッピ、アルマヴィーヴァ伯爵：ルイーダ・  
アルヴァ、バルトロ：フリッツ・オレンドルフほか  
Warner Classics 2564634089（海外盤、CD2 枚組）



《セビーリャの理髪師》のカラス唯一の舞台出演は 1956 年ですが、ロジーナをカルメン風に演じて酷評されました（ライヴ録音あり）。翌年の EMI スタジオ録音では実演と異なる役作りで臨み、少女らしい声音と語り口、浅い発声の歌唱を随所に用いて個性的なロジーナを造形しています。ステレオ録音とあってリマスターによる音の分離もクリアで、従来盤をお持ちの方も一聴の価値があります。

- ◎《イタリアのトルコ人》1954 年 8-9 月録音（モノラル）、2014 年リマスター  
ジャンンドレア・ガヴァッツェニ指揮ミラノ・スカラ座管弦楽団&同合唱団  
フィオリッパ：マリア・カラス、セリム：ニコラ・ロッシ＝レメーニ、ナルチーズ：  
ニコライ・ゲッダほか  
Warner Classics 2564634088（海外盤、CD2 枚組）



カラスは《イタリアのトルコ人》のフィオリッパを 1950 年ローマで初役し、55 年にもスカラ座で演じましたが、現存する音源は 1954 年の EMI スタジオ録音しかありません。残念なことに、この録音は指揮者ガヴァッツェニが大幅なカットを施したバージョンで行われ、第 2 幕は現行版の半分になり、ヒロインの大アリアもカットされています。モノラル録音のためリマスター効果も乏しいとの印象です。

### ▼《小ミサ・ソレムニス》批判校訂版のミス▼

人間のすることにミスは付き物。筆者も自分の文章にミスや誤植を見つけるのもしばしばで、校正の視点で見ると、他者の文章にもたくさんのミスや誤植を発見してしまいます（笑）。ロッシーニ全集や批判校訂版も例外ではなく、ミスや誤植のみならず、明らかな誤謬に気づいてしまいます。ここでは最新刊の《小ミサ・ソレムニス》全集版と、これに先立つペーレンライター批判校訂版を見ていて気づいたミスや問題を記しておきます。

#### ◎ペーレンライター批判校訂版その他の管弦楽伴奏版の初演日「2 月 24 日」は間違い！

実はこれ、かなり深刻な問題です。なぜなら 2010 年に出版されたペーレンライター批判校訂版《小ミサ・ソレムニス》のみならず、グローヴ音楽・音楽家事典の初版と第 2 版、レシーニョの『ロッシーニ事典』その他、過去の重要文献がすべて管弦楽伴奏版のパリ・イタリア劇場初演を 1869 年 2 月 24 日としてきたそれが、2013 年成立のロッシーニ全集版で「2 月 28 日」とされているのです。実は初版楽譜には初演日が「28 日」と印刷されているのに、ある段階からロッシーニ文献で「24 日」となり、それが連綿と踏襲されてきたようです。

ですから筆者も「28 日」は初版楽譜の誤植で「24 日」が正しいと信じていたのですが、8 月に購入した全集版に「28 日」と明記されていて愕然としました。それだけではありません。この重大な変更に関して、全集版には何の説明も注釈もないのです。けれども 28 日付の新聞で報じられた、前日（27 日）行われた総稽古の記事が引用されており、28 日初演の事実は揺るぎないものと思われまふ。でもなぜ確かな根拠をもって「28 日が正しい」と主張し、「24 日」の誤謬が何に起因したのかを説明しないのでしょうか……不思議な話です。

#### ◎全集版におけるピエ＝ヴィル伯爵の没年は間違い

これに対し、全集版《小ミサ・ソレムニス》にも意外な間違いがあります。ロッシーニのパトロン、アレクシス・ピエ＝ヴィル伯爵の没年が「1878 年」とあるのです（解説書 Testi introduttivi の p.19）。これに関して調べましたが、正しい没年は「1871 年」です。「1878 年」はピエ＝ヴィル伯爵夫人ルイーザの没年なので校訂者が取り違

えたのかも知れませんが、この作品の成立と深い関わりを持つ伯爵だけに、ちょっと恥ずかしいミスと言えます。

### ◎その他の留意点

全集版や批判校訂版における初版楽譜のタイトル頁転記はオリジナルの記載のままではなく、語頭の大文字小文字を一般的なそれに置き換え、原文の斜体も通常の字体に戻しています。さらに原文におけるアクセントの欠落も、断りなしに正しいアクセントが付されます。プレート番号も管弦楽伴奏版の初版は「B. et D. 11,532.」ですが、全集版は単に「11532」としています。ですから全集版だけでは初版楽譜の記載の本来の在り方が判らず、細部は現物もしくはその複製で確認しないといけません。細かなことですが、筆者は以前からそれが不満でした。

### ▼外国語と外国人名のカタカナ表記の話 (8) ▼

#### (8) オペラの題名における地名や都市名の仮名表記について

オペラの題名における地名や都市名の仮名表記に関しては、単純明快に当該都市や地名をその国の言語の発音に沿って仮名表記すれば良い、との大前提が思い浮かびます。ドニゼッティのイタリア・オペラだからといって題名の都市名をイタリア語読みして「Ugo, conte di Parigi」を「パリージのウーゴ伯爵」、「Gianni di Parigi」を「パリージのジャンニ」にしたらわけが判らなくからです……言うまでもなく、イタリア語の Parigi はフランスのパリ (Paris) を意味します。

そんなの当たり前じゃないか、という人もいるでしょう。でも現実にはロッシェニの代表作「Il barbiere di Siviglia」は過去 20 年の上演で「セビアの理髪師」「セビリアの理髪師」「セヴィリアの理髪師」「セヴィリヤの理髪師」「セヴィラの理髪師」の五つが使われています。これについては「ガゼッタ 第 11 号」に書いたので繰り返しません、筆者が推奨する「セビーリヤの理髪師」はどの団体も用いず、音引きを抜いた「セビリヤ」が藤原歌劇団で使われるだけです。

ここで地名「Sevilla」のスペイン語に即した発音の転記を「セビーリヤ」と言えば、直ちに「スペイン語の発音はセビージャだ！」との反論があるでしょう。確かに現地発音は「セビージャ」で、「セビーリヤ」ではありません。にもかかわらず筆者が「セビーリヤ」を推奨するのは、『西和中辞典』（小学館）その他で「lla」に「リヤ」を充てる表記が定着しているからです。スペイン語の単語には「lla」が多く、これを「ジャ」とすると「セビージャ」以外にも変更が必要になります（音楽用語にも Seguidilla [セギディーリヤ] や Tonadilla [トナディーリヤ] などがあります）。それもあって筆者は「セビージャの理髪師」ではなく「セビーリヤの理髪師」としたわけです。

それゆえ「当該都市や地名をその国の言語の発音に沿って仮名表記すれば良い」との大前提で言えば、正解は「セビージャの理髪師」か「セビーリヤの理髪師」のどちらかで、前記邦題は全滅です！ 藤原歌劇団は長年「セヴィラの理髪師」を用いましたが、1993 年に「セヴィリヤの理髪師」を採用、2011 年に「セビリヤの理髪師」としました。ですから変えようと思えば変えられるのです。なぜ日本中の上演がスペインの有名な地名をめっちゃめっちゃに仮名書きして平気なのでしょう……筆者には不思議でなりません。新国立劇場が率先して「セビーリヤの理髪師」を採用すれば、物事が大きく変わると思うのですが……

他にも歴史的地名の問題があります。イタリア・オペラの「Inghilterra」は過去「イギリス」とされることが多かったのですが、劇の時代背景などに即して「イングランド」とすべき事例も少なくありません。ロッシェニの「Elisabetta, regina d'Inghilterra」もその一つで、筆者もかつて「イギリスの～」と書きましたが、ある時点で「イングランドの～」に改めました。ドニゼッティの「Rosmonda d'Inghilterra (イングランドのロズモンダ)」も同様です。

他の歴史的国名にイタリア・オペラの「Borgogna」があり、ロッシェニの「Adelaide di Borgogna」とドニゼッティの「Enrico di Borgogna」はかつて「ブルゴーニュの～」とされましたが、劇の舞台が 5～6 世紀の「ブルグント王国」であれば、当時まだ存在しないフランスのブルゴーニュ地方との混同を避けなければいけません。筆者が「ブルグントの～」と変えた理由もそこにあります。(つづく)

(2014 年 11 月 5 日 水谷彰良)